

2018年1-3月

20180105

新刊書ではないが、ゴルバチョフの新しい回想（邦訳のある2巻本の大著とは別のもの）が数年前に出ていたことを遅ればせに知り、取り急ぎ購入した。妻のライサに先立たれた後に、彼女とともに歩んだ生涯を振り返った著作のようだ。680頁もあるので、すぐに読むわけにはいかないが、先ずタイトルに目が引かれた。Михаил Горбачев. Наедине с собой. М., 2012. 訳しにくい表題だが、「自分自身と差し向かいで」といった感じになる。長らくライサと二人で生きてきた自分が今や一人きりになってしまったという心境を表わしているのだろうが、実はマルクス・アウレリウス『省察録』のロシア語訳がこれと同じタイトルになっている。ゴルバチョフはそのことを知っていて、意図的にこのようなタイトルを付けたのだろうか。

20180106

昨日の書き込みへの追記。ゴルバチョフがモスクワ大学法学部の学生だったときに最も面白かった授業は、帝政期に教育を受けた老法学者による政治思想史の講義で、そこではギリシャ・ローマに始まる西洋思想史が講じられたとのことなので、ゴルバチョフがマルクス・アウレリウスの著作のタイトルを知っていたとしてもおかしくはない。

20180109

飯田隆『新哲学対話——ソクラテスならどう考える？』（筑摩書房、2017年）という本を読んだ。

日本の哲学は「哲学学」だとはよくいわれるところだが、本書は「哲学学」的な素養を前提にしながらも、それをあまり表に出さず、自分の言葉——本書の場合、ソクラテスおよびその同時代人の言葉に仮託する形をとっているが——で、しかも日常用語（序で引用されている大森荘藏の表現では「台所の言葉」）を使って、いくつかの哲学上の難問に迫っている。4つの対話のうち冒頭に置かれている書き下ろしの「アガトン」が最も長大で、充実感がある。ここでの主題は、ワインの善し悪しは主観的にしか判断できないものなのか、それとも何か客観的な基準があるのかという話だが、そこから広がって「人の行ないの正不正」という問題にまで触れている。その他の対話は旧稿の再録のようだが、人工知能（AI）と人間はどう区別されるかとか、「自己言及」を含む命題はすべて無内容と言えるのかといった興味深い問題が取りあげられている。もちろん、哲学の門外漢がこういう本をざっと読んだからといって直ちに何かを得られるというわけではないが、論理の筋の通った明快な文章であるだけに、頭の中を掃除してもらったような気がして、爽やかな読後感を持つことができ、正月休みにふさわしい読書だった。

なお、著者の飯田隆という人は私と同年で、今から半世紀ほど前に駒場キャンパスで何度かすれ違った覚えがあるが、直接の交友関係はない。名前だけは頭の片隅に残っていて、どことなく気になっていたが、なかなか手を出せずにいた（主著とおぼしい『言語哲学大全』全4巻は一応買って持っているが、未読）。この本は比較的読みやすく書かれており、

この機会に読めてよかった。

20180112

二冊の英文資料集。

① *Masterpieces of History: The Peaceful End of the Cold War in Europe, 1989*, Budapest: Central European University Press, 2011.

② *The Last Superpower Summits: Gorbachev, Reagan, and Bush*, Budapest: Central European University Press, 2016.

どちらも同じ出版社の刊行で、編者のうちの2人が共通しているほか、体裁も似ており、一対をなす資料集とっていいだろう。①は730頁、②は1014頁と、相当な大冊であり、まだパラパラとしか見ていないが、もともと英語で書かれた資料（レーガン文書、ブッシュ文書、CIA文書、国防省文書など）のほか、ソ連側のロシア語資料の英訳がかなりの部分を占めている（その他に、東欧諸国の文書館からの資料も一部含む）。ソ連側資料のもとをたどると、既公刊文献から取られたもの、ロシアの文書館で閲覧可能なもの、アメリカのいくつかの文書館に保管されているものなど、雑多である（中には、当時ソ連の外交官だったコルニエンコやフランスの研究者レヴェスクから個人的に提供された文書もある）。

利用されているロシアの文書館としては、ゴルバチョフ・フォンド・アルヒーフが最も多いが、ロシア連邦国立文書館（通称ガルフ）のうちのヤコヴレフのフォンドからとられた資料もいくつかある。前者のかなりの部分は政治局資料集（В Политбюро ЦК КПСС...По записям Анатолия Черняева, Вадима Медведева, Георгия Шахназарова (1985-1991). М., 2006; 2-е изд., 2008）やゴルバチョフ著作集に収録されており、後者もヤコヴレフ文書集（Александр Яковлев. Перестройка: 1985-1991. Документы. М., 2008）に収録されたものがかなりあるようなので、純然たる初出はそれほど多くないのかもしれない。

なお、①と重なるテーマに関わってロシアで刊行された資料集（Конец эпохи. СССР и революции в странах Восточной Европы в 1989-1991 гг. Документы. М., 2015）については、以前に紹介したことがある。こちらはロシア国立近代史文書館（通称ルガニ）から、それまで未公刊だった文書を収録したもので、相当貴重な資料を多数含んでいる。①も②もルガニからとられた資料はなく、これまで読めなかった重要資料の初紹介という点ではКонец эпохиの方がまさるのではないかという気がする。

①も②も主として外交・国際政治に関わる資料集であり、主に内政を研究している私にとって役に立つ部分がどのくらいあるかは、にわかにはなんとも言えない。それはさておき、冷戦の終焉はロシア・ソ連史だけの問題ではなく、むしろロシア・ソ連を専門としない国際政治（史）研究の重要主題でもあるはずだから、ロシア語資料の英訳がこのようにまとまった形で提供されたことは、ロシア語のできない国際政治（史）研究者にとって有用性が高いということになるかもしれない（ロシア研究者にとってはアメリカ側の資料紹介が役に立つが）。

20180120

新聞記事から。

2016年アメリカ大統領選挙に際してヒラリー・クリントン陣営を誹謗中傷する多数のフェイクニュースがネット上で拡散されたが、その一部はアメリカのトランプ支持者ではなく、マケドニア在住の若者が広告収入目当てかつ面白半分で書き込んだものだったとのこと。

だとすると、ひょっとしたら日本のネトウヨ的言説の一部も、本気でそれを正しいと思い込んでいる人たちだけではなく、正しいとか正しくないとかいったことには関心がなく、ただ単にこういう投稿をすれば人目を引くことができると考える人たちによるのかもしれない。

ネトウヨ的言説は少数の人が繰り返し投稿するために多く見えるが、実際にそういう書き込みをする人はそれほど多いわけではないという話を聞くことがあるが、それはともかくとして、本気で正しいと思い込んでいる人たちとは別に、そんなことはどうでもよいからただ人目を引くという効果だけを考えて投稿する人が一定数いるとしたら、それはそれで怖い。

20180122

西部邁が自殺したとの報に接した。

私は今から何十年か前（彼が「保守主義宣言」を発するよりも前のこと）、当時経済学系の大学院生だった友人の紹介で彼に会ったことがある。彼が『ソシオエコノミクス』という本を出してまもない頃のことだった。この本は青木昌彦編『ラディカルエコノミクス』と並んで、既存の経済学（マル経・近経の双方）を根本的に刷新しようとする野心作だというような評判があり、私も一応読んだ。それから数年後に彼は「保守主義宣言」を発し、私の友人もまもなくそれに続き、それ以降は疎遠になってしまった。もっとも、「保守化」イコール悪と考えたということではない。私自身にしても、若い頃に比べるならいぶんと「保守化」してきた。また、日本の政治報道における常識的用語としての「保守」（実は反動）と区別される本来の保守——いわば「真っ当な保守」——は尊重されるべきものだと考えている。ただ、西部の場合、「真っ当な保守」の要素とそれだけではない何か混じり合っていたのではないかという気がする。もっといえば（単なる表面的な観察に基づく印象論だが）、彼はかつて「左翼」だったときも「保守」に転じてからも、一貫して何か「過激」な要素がつきまとっていたように思える。

「棺を蓋いて事定まる」という言葉があるが、実際には、死後も評価が定まらず毀誉褒貶が続くことだろう。それが「保守とは／リベラルとは／ソーシャルとは何か」といった問題に関する議論の深化につながればよいのだが。

20180123

昨日の続き。

今の若い世代にはあまり知られていないかもしれないが、かつて青木昌彦と西部邁はかなり密接な間柄だった（60年安保の時も、70年代に経済学のニューウェーブを作り出そうとしていたときも）。彼らを中心とする共同研究の産物の一つとして、『経済体制論』全4巻（東洋経済新報社、1977-79年）という講座がある。その当時における「現代資本主義」と「現代社会主義」を共通の視座で分析しようとした、当時としては先駆的な試みだった

(青木はそのうちの「経済学的基礎」を担当し、西部は「社会学的基礎」を担当。また、「現代社会主義」の巻は岩田昌征が責任編集)。それから約40年が過ぎ、世界情勢も社会科学の状況も様変わりした。上記の業績も「現状」に関わるものとしては賞味期限切れになって久しいだろう。だが、青木も西部も世を去った今、これも「一個の歴史」として振り返ってみてもよいのではないか。

(付記) 昨日の書き込みの終わりの方で、「何か「過激」な要素がつきまとっていた」と書いたが、これは「過剰な情熱」とでも言い表わした方がよかったかもしれない。別の話だが、西部の『60年安保：センチメンタルジャーニー』(文藝春秋社、1986年)という本は活劇調の面白さがあるが、転向者の情熱に満ちているため、歴史的証言としてはあまり信頼できない印象がある。

20180126

最新刊ではないが、デイヴィッド・ホフマン『死神の報復——レーガンとゴルバチョフの軍拡競争』(上下、白水社、2016年)という本を読んだ。

私は従来、どちらかといえば内政中心で研究を進めてきて、外交・国際関係にはあまり手を出してこなかったが、内政と外交がからみあっている以上、後者を視野の外に置いておくわけにもいかないので、遅ればせかつ不十分ながら、ある程度取り込むように努めるようにしており、この本を読んだのもその一環である。

著者は研究者ではなくジャーナリストのようだが、かなり広く諸資料を集めて、細かい叙述を行っており、結構詳しい書物となっている。本書のテーマが私のあまり強くない分野であるため、具体的内容に即してきちんとした評価をすることはできないが、ただ一つ、邦訳書の副題が気になった。「レーガンとゴルバチョフの軍拡競争」とあるが、これを文字通りにとるなら、二人は競って軍拡を続けていたという意味になる。実際に読んでみると、本書の中身はそれとまるで違い、レーガンもゴルバチョフもそれまでの軍拡を反転させようとそれぞれに試み、両者の試みが種々のすれ違いを重ねながらもある程度噛み合うようになったことが部分的な成果をあげて冷戦終焉に至った——しかし、完全な成功ではなく、そのため冷戦の「負の遺産」たる核兵器および生物化学兵器が後に残った——というのが大まかな内容となっている。どうしてこのように内容とは裏腹の副題が邦訳書に付けられたのだろうか(原著のサブタイトルは *Reagan, Gorbachev and the Untold History of the Cold War Arms Race* であり[版によっては異なるサブタイトルがついているようだ]、その正確な訳ではない)。

白水社はこれまでもソ連史に関わりのある翻訳書を多数刊行しているが、それらの中には、「どうしてこんな駄著をわざわざ翻訳して出版するのか?」と感じさせるものや、誤訳を多数を含むものがいくつかある。それ以外の分野では良書を多数出している日本有数の学術出版社がどうしてそういうことになるのか、理解に苦しむ。

補1: 本書の一つの特徴として、核兵器のみならず、というかむしろそれよりも生物兵器に力点をおいている点がある。これは私はあまり意識していなかった論点なので、参考になった。

補2: 白水社はもちろんフランス文学・思想に強い出版社で、その点では尊敬に値する。ただ、これは私の偏見だが、フランスのソ連研究はあまり水準が高くなく、そのことが日

本の「フランス通」にも感染しているのではないかという気のすることがある。

20180127

昨日の書き込みへの補遺。

昨日、白水社の刊行物についてやや批判がましいことを書き、ついでにその勢いで「日本のフランス通」にも一言触れた。あまり考え抜かない放言の類だったが、とにかく書いてしまった以上、もう少しだけ敷衍しておきたい。依然として放言的な感想の域を出ず、自信を持って主張できることではないが、フェイスブックという場ではそうした思いつきの問題提起も許されるのではないかと思う。

フランスの研究者といってもいろんな人がいるが、代表的なソ連研究者と目されるH・カレール＝ダンコースの場合、初期の著作は悪くなかったが、有名になってからの仕事は「筆が荒れてきた」と感じさせられるところがある。それよりももっと気になるのは、フランソワ・フュレとかエマニュエル・トッドのような他の分野の専門家がソ連についてろくに知りもしないのに無責任な怪気炎をあげた本を書き、それがもてはやされているように見える点である。推測だが、第二次大戦後ある時期までのフランスでは知識人たちの間で共産党の威信が高かったことへの反動で、一方の極から他方の極に走るような安直な議論が広まる知的風土があるのではないかという気がしてならない。そして、そうした知的雰囲気1気が日本の「フランス通」の一部にも感染しているのではないかという気がする。白水社や藤原書店の刊行物を見ていると、どうもそんな風な感想が湧く。

予め断わっておいたように、これはあまり詳しく事情を確かめもせず、じっくりと考え抜いたわけでもない印象論的な感想に過ぎない。然るべき人からのきちんとした補正が提起されるなら、喜んで耳を傾けたい。

20170205

ロバート・サーヴィスの冷戦終焉論 (Robert Service, *The End of the Cold War, 1985-1991*, PublicAffairs, 2015) を読んだ。この本については、以前にロバート・イングリッシュによる辛口書評 (Russian Review, vol. 76, no. 4, October 2017) を紹介したことがある (201709016の書き込み)。先に辛口書評を読んでしまったため、どちらかという悪い予断があったのだが、実際にサーヴィス著を読んでみると、いくつかの欠陥があるもののそれほど悪い本ではないという気がしてきた。本書の一つの特徴は、比較的早い時期 (1987年ないし88年頃まで) に多くの紙幅を割り当て、その時期に関する記述が詳しいという点にある。他方、まさしく冷戦終焉のピークともいえるべき1989-90年にも一定の紙幅を割いてはいるものの、その時期に起きた変動の多彩さと大きさを思うなら、この部分はやや物足りない観がある。そして1991年に至ってはものすごく短く、多くの重要事項に触れずに済ませている。もし著者が冷戦終焉過程のクライマックスは1987/88年頃までだと考えているのなら、それも自然かもしれないが、そう考えているようには見えない。前の時期に精力を集中したために、後の方は息切れしたのではないかという観がある。とにかく1987年頃までの動きを知るためには結構役立つ本だと思える。もっとも、外交に集中した本であるため、内政への断片的言及はおざなりであり、ところどころ不正確だったりして、その面ではあまり信頼できない。

もう一つの特徴は、何人かの当事者たちの残した文書類（当時非公開だったメモや日記、また後に行なわれたインタビューや回想など）を多用して、あれこれの出来事を特定の当事者の目を通して詳しく具体的に描いている点にある。これはそれらの出来事をリアルに実感する上で有用である。ただ、それはあくまでも、ある当事者からの見地であって、他の当事者の観点からは別の見方もあるはずなのに、そうした多角的な突き合わせは乏しく、やや見方が一面的になっているのではないかという気がする（最も多用されているのはシェワルナゼ外相の部下たちの文書であり、そのためシェワルナゼ個人への思い入れが目立つ記述になっている）。イングリッシュによる辛口書評はそうした問題点を指摘する意味では一応当たっている（ややくどすぎる批判だという気がするが）。

こうしていくつかの問題点もあるとはいえ、批判眼を忘れずに注意深く読めば有用な本だというのが全体的感想である。辛口書評を鵜呑みにせずに虚心坦懐に読んでよかった。なお、この本と並行して、トーブマンのゴルバチョフ伝（William Taubman, Gorbachev: His Life and Times, Simon & Schuster, 2017）も読んだ（一方は 650 頁、他方は 850 頁という大冊である）。できればこの二冊を対比しつつ検討した小文を書いてみたいが、それにはある程度時間がかかるだろう。

20180206

昨日の書き込みへの補遺。

サーヴィス著は大きな歴史観のようなものを打ち出しているわけではない。全体としては具体的事実経過の紹介が中心で、ところどころに散見される著者の価値評価を仄めかす文章は欧米の論者たちの間で一般的に広まっている通念とあまり変わらず、その意味では特に新味はない。著者が最も重視しているのは、歴史に関する新しい見取り図の提出というよりも、「私はたくさんの新資料を発見して、多くの出来事の舞台裏を明らかにしたのですよ」という自己宣伝ではないかという気がする。それは確かに一つの功績ではある。だが、著者が見つけた資料とは別に、これまでも参照可能だった資料とか、それらを活用した既存研究とかも結構たくさんあるのに、それらとの突き合わせはあまりきちんと行なわれていない。イングリッシュが辛口書評を書いたのは、「自分だってサーヴィスに負けない立派な研究をしているのに、それを踏まえないのはけしからん」という気持ちが背後にあるのではないかという気がする。

20180209

私の住んでいる地域では千葉テレビは受信圏外のはずなのだが、あるとき、ふとチャンネルを合わせてみたら映ることが分かった。このチャンネルでは昼食の時間帯に「木下恵介アワー」とかいうシリーズタイトルで 1960 年代のテレビドラマを毎日放映している。1960 年代といえば、私は既に物心ついていて、子供なりにその当時の日本社会を見ていたはずなのだが、ドラマを見ていると「これはもう少し昔のことではないか」と感じることもある。自分と対象の時間的距離が実際よりも大きめに感じられるのはどうしてだろうか。

千葉テレビではこの時間帯以外にも、古い懐メロ的ドラマをよく放映しているようだ（新規製作費用がかからず、安上がりなのだろうか）。私のような世代の人間でもあまり懐かしさを感じない旧作ドラマを好んで見る視聴者はどういう人たちで、どういう感覚で見て

いるのだろうか。私はそれほど真面目に見ているわけではなく、妻と一緒に昼食をとりながら冷やかしながら半分は眺めて、ときおり登場人物の立ち居振る舞いや台詞に「そりゃおかしいだろう」などとツッコミを入れるだけだが、「昭和の日本」を文化人類学的に研究しようと思うなら結構有用な素材かもしれない。

(2月12日の追記)。このシリーズのうち、今日最終回を迎えた『喜びも悲しみも幾歳月』は題名も主題歌も超有名だが、最初のうちはあまりピンとこず、正直に言って退屈だった。しかし、終わり近くになって、主人公夫婦が歳をとり、息子には先立たれ、娘は結婚して外国に行き、二人だけになりながら、二人で支え合って生きていこうと誓い合うあたりは、具体的状況はわれわれと異なるものの、どことなく身につまされるものがあり、つい引き込まれてしまった。

20180220

『シャーデンフロイデ』という同一のタイトルの本が相次いで刊行されたようだ（一つは勁草書房、もう一つは幻冬舎）。辞書では「人の不幸を喜ぶ感情」という風に説明される言葉で、ロシア語ではズロラーツトヴォに当たり、英語ではドイツ語をそのまま借用してシャーデンフロイデというようだ。

この言葉についてはちょっとした思い出がある。1990年のドイツ統一の少し後あたりの時期に、ある会合で同席していたドイツ法の故・村上淳一が、「いま社会主義の悪口をいっていい気になっている人たちにはシャーデンフロイデの心理があるのではないか」という趣旨の発言をするのを聞いたことがある。私は村上さんとは一時期同じ職場にいたとはいえ、専門も年齢も隔たっていて、親しいというよりも遠くから仰ぎ見るといった感じだったが、この発言を聞いて秘かに親近感を覚えた記憶がある。

それにしても、このような普段はあまり聞き慣れない特異な言葉が広く使われる状況（漫画のタイトルに使われた例もあるようだ）というのは、一体どういう世相を反映しているのだろうか。

〔追記〕村上さんはドイツ統一がまさしく進行中だった1990年に「社会主義体制の崩壊と〈非共産党左翼〉の課題——ユルゲン・ハーバーマスの展望」という論文を書いている（『思想』1990年10月号、後に「社会主義体制の崩壊と現代思想」と改題して、村上淳一『仮想の近代——西洋的理性とポストモダン』東京大学出版会、1992年に収録）。

20180322

杉原千畝という人およびその事績について、ごく大まかな話は以前から一応聞き知っていたが、安易な美談調の物語が多いのではないかという漠然たる先入観があり、関連書を読む気がなかなか起きなかった。それでも、私の研究にリトアニア史やユダヤ人問題もある程度関わる以上、杉原のことを何も知らないままでは済まされないという気がしてきて、とりあえずヒレル・レビン『千畝』（清水書院、1998年）という本を読んでみた。著者が日本人でないためもあって、心情的な美談を避け、杉原を歴史のなかに置くというのが一応の狙いであるかに見える。もっとも、この本に対しては相当強い批判があり、史実の歪曲とか関係者への名誉毀損とかいったことが問題とされ、訴訟沙汰にまでなったようだ（その結末についてはよく知らない。また、主たる批判の矛先は邦訳書に向けられてい

るようだが、そのどこまでが原著の責任なのかもはっきりしない)。私がざっと読んだ印象でも、ところどころにやや不正確ではないかと感じられるところがある。純然たる歴史研究書というよりもややドラマ仕立てのような感じで書かれたところもあり、邦訳書には注や文献一覧もなく、記述の根拠を確かめることもできない。そういうわけで、この本の歴史書としての信頼性には疑問符がつくが、本書の成否とは別に、心情的な美談ないし聖人伝ではなく複雑な国際関係史の中に杉原を置き直す作業自体はやはり必要だろう。そうした「歴史としての杉原」論があればよいのだが、今のところよく分からない(阪東宏『日本のユダヤ人政策、1931-1945』未来社、2002年は杉原問題にも触れているようだが、未見)。どなたか、ご存じの方がいたら御教示ください。

(追記) 関連する別の問題として、リトアニアにおける反ユダヤ主義という深刻なテーマがある。このテーマについては、若手の重松尚氏が『東欧史研究』第39号(2017年)および橋本伸也編『せめぎ合う中東欧・ロシアの歴史認識問題』(ミネルヴァ書房、2017年)に論文を書いている。今後の大成を期待したい。

20180326

橋本伸也編『紛争化させられる過去——アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』(岩波書店、2018年)が刊行された。「記憶と歴史の政治化と紛争化」というテーマをめぐっては、種々の事例についてそれぞれに異なった角度から大量の議論が提出されているが、これまでのところ、そうした論争は相互にあまり関係なしに展開されており、異なる事例の比較という問題もごく一面的にしか取り組まれてこなかった。編者の橋本氏はこの問題に関して、自分自身で探求を重ねると同時に、世界各国の多様な事例をつきあわせるべく国際共同研究を精力的に推進してきた。先に刊行された橋本編『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』(ミネルヴァ書房、2017年)もその成果の一端を示したものだが、今回刊行された論集は2015年11月に関西学院大学で開かれた国際会議をもとに、そこに提出されたペーパーの改訂版や視野を広げるために新たに委嘱して書かれた論文などを収録している。副題に「アジアとヨーロッパ」とあるが、従来、日本ではヨーロッパ諸国の事例は「学ぶべき対象」、アジアの事例は自分たちが直接関わる実践的な問題という風に、かなり性格を異にするものとして取り組まれてきた。それらを共通の土俵に載せ、比較可能性という問題を提起したのは編者の大きな功績だと感じる。

私自身は橋本氏の勧誘を受け、ここ数年このプロジェクトにある程度関わってきており、この論集にも終章を寄稿した。非常に重たいテーマであり、この終章の執筆には相当苦しんだ。出来映えは自分で云々すべきものではないが、とにかく私自身にとっては苦勞したおかげで得るところの多い作業だったと感じている。諸方面からの活発な批評が交わされることを期待したい。